

平和・人権
社会・宗教
政治と暮らし
分かれ合ひ

No.68

共に生きる

元米海兵隊の
女性遺体遺棄
事件を

再発防止策は破綻した 植民地扱いは限界だ

沖縄タイムス 5月22日

琉球新報 5月21日

許アベ政

【沖縄タイムス】これまでに何度「また」という言葉を繰り返してきただろうか。県議会による米軍基地がらみの抗議決議は復帰後206件。凶悪犯の検挙件数は574件。いくら再発防止を求めても、米軍の対策は長く続かず、基地あるが故に、悲劇が繰り返される。(21日)・沖縄では民間地域であっても安全ではない。女性はどのようにして自分の身を守ればいいというのか。95年の県民総決起大会で決議したのは、米軍人の綱紀粛正と犯罪根絶、日米地位協定の見直し、基地の整理縮小などだった。県民の要求はまだ実現されていない。(22日)

【琉球新報】・なぜ繰り返し繰り返し、沖縄は悲しみを強いられるのか。この悔しさはまさしく、持つて行き場がない。沖縄はまさに現在進行形で「戦場」だと見える。:政府は火消しに躍起とされる。沖縄は単なる「火」の扱いだ。このまま米軍基地を押し付けておくために当面、県民の反発をかわそうというだけなのだろう。沖縄の人も国民だと思うのなら、本来その意を体して沖縄から基地をなくすよう交渉するのが筋ではないか。(21日)

そして【翁長知事】も「基地と隣り合わせの生活を余儀なくしている県民に新たな不安を招く」として断じて許せないと怒りをあらわしている。ところが、安倍内閣閣僚の一人がオバマ大統領の訪問を前に「タイミング的にまずい」と嘆いたことが報じられています。本音があらわです。

いくら安倍政権が米国代表や米軍関係者に「抗議」したとしても茶番劇です。「再発防止・綱紀粛正」のことばはもうたくさんです。安倍政権は、「基地撤去こそが痛ましい事件を繰り返さない最良の解決策だ」との声を真摯に受けとめるべきです。また日本国民を屈辱的な立場に立たせる「日米地位協定」を根幹から改めなければなりません。この事件は、まさに日本で起きているのです。「殺され、傷つけられ、辱められ、まるで虫けら同然に扱われてきた」瀬長亀次郎さんの言葉(「民族の怒り」)が思い起こされます。

3面、事件に関する特別寄稿を掲載

6月の講演・集会案内

- ◆6月4日(土)下関アムネ例会(市民活動センター)…14時
※班忠義監督「太陽がほしい」映画第3回打ち合わせ
- ◆6月11日(土)「太陽がほしい」小倉で上映と班監督講話
北九州市立生涯学習センター1000円…13時30分～
- ・多文化共生関門ネットワーク設立総会と講演
北九州市立生涯学習センター3階…13時30分～
(同じ場所の別々の部屋です。お間違えないように)
- ◆6月25日(土)キリスト者9条守りたい(西南KCC)…14時

みなづき
水無月
6
2016

沖縄県うるま市に住む20才の女性(島袋里奈さん・行方不明)が米軍関係者によつて拉致・遺体遺棄された重大事件が発生してしまいました。沖縄タイムスと琉球新報は、次のように報じています。

世界人権宣言(谷川俊太郎訳)

第17条 財産を持つ

人はみな、ひとりで、またはほかの人といっしょに財産をもつことができます。自分の財産を好きかつてに奪われることはあります。

6月11日(土):イチイチ祈りの会

カトリック
黒崎教会ペトロの部屋、午後1時30分～
どなたでもお出でください。

沖縄・辺野古レポート(その5)

(元中学校教員 池村好順)

前号の報告

安倍政権は、鬼の機動隊と呼ばれる東京の機動隊を辺野古に派遣して、座り込み住民を暴力的に排除。ゲート前の地面に引かれた線を基地側に一歩でも超えれば**日米地位協定**の「刑事特別法」違反で逮捕。

県民に牙むく国家権力機動隊

実際に今年3月15日、キャンプ・シュワブのゲート前で、基地所属の海軍1等水兵による女性暴行事件(13日未明)の抗議行動の際、一人の男性が米軍に身柄を不当に拘束され「刑事特別法違反」として名護署に逮捕されました。車に乗っていた米兵が挑発行為を繰り返したため、米軍の車に男性が近寄つて抗議した際に、「立ち入り禁止区域境界線」を越えたとして逮捕されたのです。山城さんを中心に直ちにたくさんの人々が名護署への抗議に押しかけました。そして、21日には2500人が参加した緊急抗議集会が辺野古ゲート前で開かれています。米軍関係の犯罪件数は、復帰後5896件。基地がある故に繰り返される米兵による事件、それに抗議する沖縄の市民を不当にも逮捕するこうした異常さ、まるで沖縄を植民地のように扱い沖縄の市民を侮辱する許し難い行為です。異常で過激な警備はすでに辺野古の海でも実施されていました。映画「戦場ぬ止み」のなかで衝撃的なシーンが映し出されています。海上保安庁は数十隻にのぼる大型巡視船、警戒

船、高速警備艇を次つぎに投入し、反対する市民を強圧的に威嚇・排除しています。

沖縄県民に対して牙をむく国家権力、沖縄だけに見せる政府の非情で陰鬱な「素顔」を、本土の全国紙・大手マスコミはなぜ伝えないのでしょうか。安倍政権は沖縄・辺野古米軍新基地建設を強行し、米国への「忠誠心の証し」として差し出しだそうしているように思われます。そして、憲法違反の「安保法制=戦争法」の具体化を、ここ辺野古で強権的に実行しようとしているのではないかでしょうか。小林節・慶應大学名誉教授は、沖縄での講演(20日)で次のように指摘しました。「新基地建設は『露骨な憲法違反だ』。……、地方特別法の話ではないと政府は開き直っているが、95条の精神によれば立派な憲法問題で、沖縄の人たちに拒否権がある」と。

憲法第95条に保障された「拒否権」を、非暴力の座り込みという形で市民が示している、これが沖縄・辺野古ゲート前だと思います。(次ページへ)



女性遺体遺棄事件に抗議

市民らは「彼女の命を返せ」「米兵を外に出さないことが一番の再発防止策だ」と抗議の声をあげた。

(写真と文は、沖縄タイムス5月26日ネット)

分かち合いのひととき

虹の会

4月24日 18名参加

— いつくしみこそが「神が最も喜ばれること」 —

教皇フランシスコの一般謁見演説【なぜ慈悲の特別聖年を行うのか】をもとに分かち合いました。

「いつくしみとは本当の優しさであり、許し合いの大切さではないでしょうか。」「神が最も喜ばれることを証する生き方をしたいと思います。」などが分かち合われました。

次回2016年6月26日ミサ後。
どなたでもご参加ください。

5月22日 12名参加

— 私はこう思う。そんな普通の言葉が、攻撃されたり、場を失われたりして、發せなくなっていないでしょか。 —

2016年4月30日付朝日新聞記事『再稼働 口にした「なぜ」』をもとに分かち合いました。

「自分の身の回りに关心を持ち、見過ごさないで言葉にしていくことが大切。」「恐れることなく口に出していくたいと思います。」「分かち合いによって、多くを教えられます。」などが分かち合われました。

心底憤りを感じます

(元中学校教員 池村好順)

再び、沖縄の悲惨なニュースが伝わってきました。

沖縄県うるま市の二十歳の女性が殺害され、恩納村の雑木林で女性の遺体が発見されました。犯人は元海兵隊員、米軍の軍属の男。残忍で卑劣な犯行です。家族や友人は、必死に探していました。しかし、その願いは一瞬にして無残に打ち砕かれてしまいました。繰り返される米兵・軍属の残虐な犯罪！ 心の底から憤りを感じます。絶対に許すことはできません。残された家族の悲しみの深さを思うと言葉を失います。

被害者の女性は二十歳の成人式を今年迎えたばかり、きっと幸せな日々を送っていたはずです。女性がこの世に生をうけた20年前の沖縄、怒りと抗議の声が全島にあふれています。北部の小学校6年生の少女が、3人の米海兵隊員に暴行される痛ましい事件が起き、県民8万5000人が沖縄県民総決起大会に集まりました。そして、この大会で①米軍犯罪の根絶、②日米地位協定の見直し、③基地の整理・縮小、④被害者への完全保証を日米政府に厳しく要求しました。この沖縄県民総決起大会で、若者を代表してひとりの女子高校生が切々と訴えました。

「基地があるが故の苦悩から私たちを解放してください。私たちに平和な沖縄を返してください！」

この高校生の「訴え」こそ、沖縄全県民の「痛切な

願い」であり「切実な魂の叫び」です。しかし、この総決起大会から20年が経過し、今まで悲惨な事件が繰り返されました。この間、日本政府は当事者として一体何を取り組んできたのでしょうか。

安倍首相は今回の事件に対して、「非常に強い憤りを覚える、徹底的な再発防止などを米側に求める」と述べています。しかし、事件が起きるたびに繰り返される「再発防止」・「綱紀粛正」という言葉は、空々しく虚しく響いてきます。日米地位協定の見直しも基地縮減も、普天間基地の辺野古への移転中止も首相の発言には一切ありません。

「基地があるが故の繰り返される米兵・軍属の犯罪！」、犯罪の元凶はここにあります。この沖縄の現実を直視するならば結論は明白です。20年前の沖縄県民総決起大会で訴えた、あの女子高校生の「訴え」に日本政府として本気に向き合い、その実現努力を始めることです。沖縄の米軍基地の過重な負担縮減の決断を行い、米兵・軍属の犯罪の元凶をなくす、このことが強く求められています。罪のない尊い命が、再び残忍に奪われてしまうことを、絶対に許してはいけません。

いつどこで巻き込まれるかしれない命の危険性は、沖縄だけの問題ではありません。警視庁発表では、1989年から今年4月末までに、全国で231件の米軍属による刑法犯が発生しています。私たちの一人ひとり、避けて通すことのできない深刻な問題だと思われて仕方ありません。沖縄県民の怒りの抗議行動は急速に広がっています。是非注目しましょう。

《アムネスティ》下関通信 (2016/6)



「山口県へ避難してきた皆様へ。私たちは一人ではありません。避難者同志つながっていきましょう。“私たちはここにいます”と声を上げていきましょう。」

これは福島大地震と原発事故により、安心して住める故郷を失った東日本(放射能を含む霧、雪、風のブルーム～地球の体積の80%を占める対流運動は関東まで達し、健康被害者が続出した)からの避難者を支援する「山口県避難移住者の会」のキャッチフレーズです。

この会の代表者はご実家のある下関長府に避難され(奇しくも私と同じ高校卒)、この5/14下関労働教育センターでゲスト講演をされ、震災時から会を立ち上げるまでの辛い貴重な報告を伺うことができました。避難住民は、仕事も住まいもすべて置いてゆかざるを得ないケースが多く、これからも増加の見込み。行政はさかんに危険度は薄れたと帰郷を勧め

ているが、甲状腺ガン他、健康被害者は増加中。以下の活動は「保養」(一定期間別の土地で暮らすことで体内の放射能を抜く。医学的効果大。ペラルー市では年間10万人が参加)と、「移住」のための空き家を探している、山口県内の情報待ちとのことです(電話 090-2942-1364)。

2年前の日本アムネスティの声明は「震災から3年、改めて人権状況の改善を求める」。事実とは異なる無責任な政府対応は、「安全への権利」(世界人権宣言3条)、「知る権利」(国連自由権規約19条)、「福島の放射線警戒区域住民の生活保護措置」(同社会権規約委勧告)などにもとり、政府内に「人権担当部署の設置」を求めていました。

今夏も行われる「関門保養プロジェクト」に参加したいです。5/14集会には、宇部アムネスティ会員がご夫婦で参加されていて偶然の再会を喜び合いました。

(2016.5.25 アムネ下関、山県)





原子炉と核燃料について

原子炉は、起動し運転するためには、一般の機器のように、単に「スイッチ」を入れると「すぐに」動き出すというわけにはいかないものであります。「準備作業」を必要とするのです。

加圧水型炉（PWR）の場合には、まず一次冷却水をヒーターで加熱しながら加圧し、一次冷却水ポンプを起動します。そして、運転開始の条件を整えた上で炉心の制御棒を次第に引き抜いていき、核燃料が核分裂の連鎖反応を持続的に起こす「臨界」の状態にします。

「臨界」とは、連鎖反応が持続し、かつ拡大も縮小もしない状態のことをいいます。つまり、反応系全体として、一の中性子で一個のウラン（またはプルトニウム）が核分裂をする割合がコンスタントに保たれている状態のことをいいます。その限界のことを「臨界（critical）」といっています。

英語の「臨界（critical）」という意味は、「断崖絶壁」という意味です。一を超えると、連鎖反応がねずみ算式に急速に拡大し、原子炉では核暴走事故を起こす危険性があり、原爆では一瞬で全体が核爆発を起こすことになるのであります。

「臨界」は、核分裂するウラン235やプルトニウム239に中性子が衝突し、原子核が割れると、中から2～3個の中性子が飛び出し、これが隣のウランやプルトニウムに衝突して、核分裂が波及してゆく。この連鎖反応が持続していくのが、拡大も縮小もしない状態になっているということなのです。したがって、核暴走も、核爆発も起こらない状態なのです。

ところが、1999年9月30日に東海村のJCOで臨界事故が発生しております。その事故後の臨界原因の解説によりますと、「容器の形状が細い筒状であれば臨界には達しない。JCOの作業者は、それを臨界点を超えやすい形状の容器にいれたために事故が発生したのだ」とされております。

この事故は、JCOでは、増殖実験炉（常陽）用として、核燃機構（旧動燃）がフランスから輸入したところの濃縮度約19%の八酸化三ウランを硝酸ウラン溶液に転換する作業をしていて臨界事故を起こしたのです。この時の作業は、直径17.5センチ、高さ2.2メートルの貯塔と呼ばれる細長いタンクに、硝酸ウラン溶液をポンプで移し、濃縮を均一にして出荷するというものがありました。この際に扱う条件は、濃度の点から一度に扱うウラン量2.4kg以下にしなければならな

いというもので、それ以上になると臨界に達する恐れがあるということでした。そのためには、細長い形状の貯塔を使用することだったのです。細長い形状の貯塔であれば、ウランが臨界に達しないのです。ところがJCOは、当日細長い形状の貯塔を使わず、臨界点を超えやすい形状の沈殿槽にバケツで硝酸ウラン溶液を入れるために事故が発生したのです。

この臨界事故では、最初に連鎖反応が持続し、かつ拡大も縮小もしない状態を超え連鎖反応が急速に拡大し、その後、核分裂反応がストンと落ち、一進一退を繰り返しながら、事故収束まで20時間に渡って臨界状態を続けたのです。この状態は、現場から2kmのところにある日本原子力研究所のキャッチした中性子放出量の変化グラフで判明されております。

しかし、核分裂反応がストンと落ちて20時間にも渡って臨界状態が継続して事故を収束させることができたということは、全く不思議なことだったのであります。臨界反応を起こした容器の内部には、規定を超えて16kgのウランがあり、そのうち核分裂するウラン235が18.8%、正味3kgも入っていたのです。ところが事故収束後に核物理の専門家の解析したところによると、20時間に渡る反応で核分裂したウランの総量が、推定わずかに「1mg」だったといります。この事実について、私たちは単純な算数にあてはめて考えてみると、ウランの危険性の実態をよく理解することができます。

すなわち、水を見ると水1cc(1cm³)が1g(1000mg)であり、1mgは1mmの大きさしかありません。これに対してウラン235は、その水の約20倍近い比重(9.04g/cm³)で純金とほぼ同じ重さを持つ物質であるといわれております。したがって、東海村で核分裂した「ウラン1mg」とは、水1mmの20分の1ほどの微量のウランであったということになります。その³⁰⁰万³⁰⁰倍程度の微量のウランがあれほどの大事故を招いて、労働者・住民等「千人以上を中性子被曝させ、二人（の労働者）の生命を奪ったのである」とされているのです。

つまり、その微量のウランは、容器に入っていた核分裂性ウラン全量のうちの1mgだったのであり、それを算数的にみると、 $1\text{mg} \div 3\text{kg} = 1\text{mg} \div 3,000,000\text{mg}$ でありますから、核分裂しうるウラン235のうちの「300万分の1」しか分裂しなかったのに、あれだけの大事故を起こしたことになるのです。

それでは、残りの299万9999mgのウラン235は、なぜはじめのような激しい核分裂反応を継続しなかったのでしょうか。それは、決して原発の装置が安全につくられているためではなかったのであります。また、関係者に安全対策の技術を持っていましたから防止できたというものではありませんでした。

その原因は、硝酸溶液が分裂の熱によって煮え立つ状態になり、容器の中に気泡（アワ）が大量に発生したことによるものです。すなわち、容器中に気泡が大量に発生したことによって、ウランとウランの距離が離れ、連鎖反応が起こりにくくなったこと。

気泡が発生し空洞をつくり、中性子は水（水素）に衝突する回数が少なくなつて減速されにくくなり、ウランの核分裂が起こりにくくなつたため、偶然が臨界点を保つ状態をつくったこと。しかも容器の沈殿槽の上部が筒状の穴のある状態となっており、沸騰液から出るガスが抜けるようになっていたといわれています。つまり、容器に「フタ」がされていて、密閉状態になっていた場合であれば、次第に内部の圧力が高くなり、単純なガス爆発を起こした可能性があったのです。

沸騰水型炉（BWR）の場合には、加圧水型炉との違いは加圧する事がないので、二次冷却水系がありません。しかし、運転を開始するのは同じような操作をして蒸気が発生する条件を整えていきます。そして、①原子炉を臨界状態にして、②タービンを起動するのです。加圧水型も沸騰水型の原子炉も、準備開始から定格運転に達するまでに『二日間』ほどかかる

のが普通であるとされています。原子炉が定格運転に達すると、その後は燃料棒の燃焼が進むにつれて核燃料ウラン・プルトニウムの成分が減ってきます。そのために出力が下がり気味になります。そこで、制御棒を引き抜いて中性子の量を増やし反応を高めるという作業が一般的に行われています。制御棒以外にも、炉の反応を制御するための手段として、次のことも用意されています。

加圧型炉では、一次冷却水に「ホウ酸」が混ぜられています。この「ホウ酸」は中性子を吸収するので、ホウ酸の濃度を調節する性質があるのを利用して、核分裂反応を制御するといわれています。沸騰水型の場合には、炉心を循環させている冷却水の水量を変えることで反応が変わるという性質を利用して、制御棒とともに冷却水の循環流量によって炉の反応制御とされているのです。

原子炉を停止する場合には、ほぼ起動と逆の手順がとられていますが、時間をかけてゆっくりと停止作業が行われるのであります。急な停止をすると、原子炉に急激な熱変化を与えることになり、事故発生の危険性が生じます。さらに設備そのものの寿命を縮めることになるからであります。（続く）

怖いです（沖縄 中）

内地のみなさんは今度の元海兵隊員による女性殺害事件をどれほど身近に感じておられますか？私はいま沖縄県浦添市ですが、普天間も嘉手納基地もすごく近くに住んでいます。ここに居て感じることは、米軍海兵隊は、沖縄で人を殺す訓練をして外国に行かされ、戦争をして帰ってきていて、そしてその兵隊さんの目つきは怖い、んです。優しいアメリカ人の目じゃないんです。この事件は、沖縄では毎日ビッグニュースとなっていますが、内地はこのニュースが薄れているようだと聞きました。沖縄の事件じゃないです。日本で起こった大事件です。それを実感できるのが沖縄で、米軍基地があるからなんです。基地があつても潤つてなんかいません。基地でずっと苦しめられています。でも沖縄の人たちは持ち前の陽気さと団結で、いつも困難な時を乗り越えようとしていますよ。

これでも市議会議員？（H）

熊本地震発生直後から、ネット上で「朝鮮人が井戸に毒を投げた」など悪質な差別デマが流布されました。これに対し、福岡県行橋市議会議員の小坪慎也氏がこれを公然と擁護する発言をしています。「朝鮮人が井戸に毒を入れた」というデマが飛び交うことに対しては仕方がないという立場である。「治安に不安がある場合は、自警団も組むべきだろう。」（本人のネットより）…どう思いますか。

ツイッター

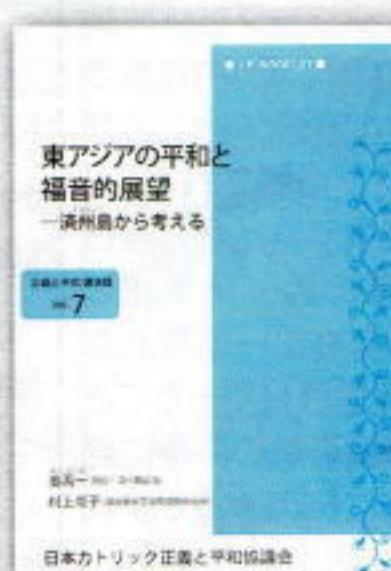
びわ湖一周デモ（山陽小野田市 F）



（写真はネット上、茨木市議・山下慶喜さんのブログより）

連休に「原発全廃！びわ湖一周デモ2016」全行程は5日間ですが二日目と四日目に参加しました。特に四日目は湖西を南下。ずっと琵琶湖を左に眺めながら歩きました。県内に14基を抱える福井はすぐ隣。熊本の惨状が目に焼き付いてる中、地震大国に原発は要らない！の思いを強くしました。

できました！平和講演録 VOL.7



2014年12月～15年12月まで「共に生きる」に連載したカン・ウィル済州教区長の講演録と村上尚子さん（津田塾大学国際関係研究所）の「済州島から東アジアの平和を考える」文献が掲載されたブックレットができました。

A5版60P 今までに沖縄問題と重ねて学べる書です。1冊150円（問い合わせ-編集部までFAX093-622-1290）

歴史問題にみる日中関係

(6)

『慰安婦』に太陽を



作家・ドキュメンタリー映画監督

班 忠義さん

※文責／編集部

(連続7回)

昨年、第12回のアジア連帯会議にインドネシアの女性が来ました。9歳で「オガワ」という下士官に一晩に6回、数えるんですね。

9歳の女性が6回と数えるそのつらさ、どうなのでしょう。その「オガワ」さんは日本に帰つて出世したかもしれません。軍人恩給をね、受けたかも知れません。ただその女性は今も生きています、すごくみじめなガイサンシーのように最後は、毒薬を飲んで死ななければならぬ……。このような世界はアジア諸国みんな受けていて、傷を背負う女性がいっぱいいるのです。

日本は「慰安婦」問題を「強制連行はなかつた」とか「水商売だ」と。こんな世界あるんでしょうかね。今、「慰安婦」問題に関心持つ人はみなさんの年令が多いですよ。若い人は、この場に来ないし知らない。現在はインターネットの時代で、このような生の話はくどいと。たとえば、今の食事は味がなく添加物をいっぱい入れたらおいしいというのが現実のようで、歴史もそうです。このような原文のものは、みなさん見ないですよね。いろいろ味つけられたもの、インターネットなどそういうような添加物の嘘の情報が、日本中に流れています。先ほどネットで見たんですけど、まともな話は1つだけであと全部右側です。危ないです。この国は。とすれば中国と対決するなら中国つてどういう国？暗黒の社会ですよ、いま。反体制の、このような集会をやるとすぐ警察がきます。別の映画に出てくる慰安婦にされた女性

が、1995年に北京で記者会見し、日本で訴訟しようと話したから、中国公安が入つてカメラを全部押収したんです。その場面をロイター通信が撮つたんです。それでも1秒間1万円で買わなければならぬ。30秒で30万円出して。このような世界ですね。

山西省の被害者のほとんどが1942年に連れ去られ、そこから始まつたと言つてもいいですね。たとえば一人のおばさんは1939年に日本の大部隊が来て何か盗み、彼女は逃げて捕まり輪姦された。そのような一次被害があつたという証言がありますけれど、中国の戦場はどこでもそういうような話がありますけれど、それが始まつたのは1942年です。

この1942年は大事な年です。前年の真珠湾攻撃で日本がアメリカと戦うことになり、中国大陆にいた部隊も南方にいきます。印度ネシアなどに行つたんですね。その時、日本兵たちは負けることが何となくわかる。送つてきた食糧でわかるんですね。以前は米、缶詰などいっぱいあつたのにそれが来なくなる。現地の巡回に立つと、粟を食べなければならぬ情況です。また、日本でも2~3年間補給部隊があり、リタイヤという除隊があつたのですが、それが無くなる。ほとんど4~5年の兵隊は、そのような精神状態で王様のように周りの村に女を出せと。それでこのような兵士たちに監禁されてしまつたんです。インドネシアも中国と同じです。もうひとつは、山西省では1942年になると光があつたんですね。(続く)

編集後記

沖縄事件の報道は「琉球新報」がスクープし、「沖縄タイムス」も追つて沖縄県中に広まりました。共に生きる紙の沖縄通信員(中さん)からすぐ情報が。ところがネットのヤフーにはその事件情報が掲載されない。18日夜、逮捕が確定となり全国紙やテレビ局も翌日から一斉に「米軍関係の…」「米軍属の男…」と報道しました。その時「米軍関係者の存在に一切触れなかった新聞社が読売と日経新聞(全国版)」だったことを後日知りました。この不可解な報道姿勢の背後に見えるもの。安倍政権の意向を忠実に伝えようとすれば、国民には知らせないでおこうとの思惑が。(瀬下)